
裏探偵 Back Detective

ものかき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏探偵 Back Detective

【Nコード】

N5335Z

【作者名】

ものかき

【あらすじ】

謎あるところに探偵あり。

一般人では到底解決が出来ないであろう事件を「裏で解決する」探偵。

その名も裏探偵、別名はBack Detective。

そんな裏探偵を名乗る謎の青年と、スタントマン、ソムリエという

愉快な仲間たちも入り乱れ、彼の華麗な推理が今幕を開ける！
……かもしれない。

プロローグ

謎あるところに、探偵あり。価値あるところに、怪盗あり。
それはどこの時代、どんな場所においても永遠不変なものである。
もちろん、この現代においてもまた然り。

トリックアート。

それはまさに名の通り、目の錯覚を利用し、平面上に書いた絵を立体的に見せ相手を騙す絵のことである。その立体の具合といったらまさに目と言うよりは脳が騙されるといった方がしっくり来るほどだ。

このトリックアートは本来の絵画に比べそれを描く画家の数は劣るものの、町行けば実に様々なところで見ることができる。

しかしながら、多種多様なトリックアートを建物一面に書き尽くした美術館というのは、片手で数えるしかないのではないだろうか。

そんな数少ないトリックアート美術館のうち今回の事件の幕開けを

飾る美術館は、英国某所にある『ブリテン・トリックアート』という美術館である。

深夜。

巡回警備も交代の時間に差し掛かっていた。この交代で夜勤も終了する屈強な警備員たちはあくびを噛み殺しながら今から警備に入る警備員にたすきを譲る。

「ふぁ……！あとは頼んだぜ……」

「了解」

警備員は美術館の鍵を新たな警備員に渡す。さて、これでやっと家に帰れる……。と、警備員が思った瞬間である。

「うわっ！？」

「！な、なんだっ！？」

新たな警備員が叫びをあげたかと思うと、何かを避けるかのように飛び退いた。驚いたもう一方の警備員は慌てて新たな警備員の方を向く。

「おい！？何があった！？」

「な……なにかが飛んできたっ……!？」

「飛んできた？」

警備員は素早く床に張り付くようにして視線を張り巡らせた。なにかが飛んできたということは、床に飛来物が落ちているということだ。警備員としてそれを見逃すわけにはいかない。

「ん……?」

そんな警備員の目にあるものが飛び込んだ。

床の上に紙が落ちている……。

警備員は慎重にその紙に手を伸ばす。普通の紙ではなかった。少なくとも、コピー紙の類ではない。

触ってみると、ツルツルとした高級感の溢れる厚紙だ。警備員は恐る恐る拾い上げてみる。表面には三日月をかたどったロゴマークが入っていた。そして、それを裏返してみると……? ?

『紳士淑女の諸君、ごきげんよう。英国の短い夏をいかがお過ごしだろうか。』

こちらは今までに頂戴した盗品の鑑賞で次の犯行までのささやかな余暇を過ごしている。

さて、そろそろ勤労意欲に掻き立てられて、こちらも新たな犯行タ―ゲットを決めさせてもらった。

こちらの美術館 『ブリテン・トリックアート』の、来る“ベ
イ”エリック展”にて、トリックアートの権威・ベティ”エリッ
クの描いた最高傑作である“迫り来る波濤”を頂戴しに参上する。

“ベティ”エリック展”が終わった頃には、“迫り来る波濤”は我
が手に有ることだろう。

怪盗ルネット』

「 っ、これは……!?! 」

警備員は紙に書かれた文面に目を通すと、気色を変えて電話機に飛
びついた。

コール音が静まった美術館内に鳴り響いた。そして、ガチャリと受
話器が上がる音がスピーカーから鳴る。

『 もしもし 』

『 もしもし!?! 大変ですッ!?! 』

警備員は拳を握りしめ受話器に訴えた。

「 か、怪盗から予告状が届きましたッ!?! 」

#1 スタントマン

「お願いしますっ！この通りです！！」

いきなり彼女が席から立って平身低頭し始めたものだから、周囲の目が彼女、そして私に注がれるのはある意味当然と言えた。しかし、もちろんその視線の中には白い目の視線、驚きの視線、好奇の視線……つまり私を居たたまれない気持ちにする視線も少なからず含まれているわけだから、私は控えめながら切実にこう言わざるを得ない。

「……頼むから、落ち着いて、席に座ってくれないか……！」

恥ずかしいと思ったらありゃしない。ここはカフェの中なんだぞ！！

「いいえ！私はあなたが良いと言ってくれるまで頼み続けます！どうか、この通り！」

さらさらと、彼女の長く伸ばした金髪が重力に従い垂れる。危うくコーヒーカップに入るところだ。

「いや、だから……」

私は、人目がなかったなら両手を高く掲げたかった（今でもそうしたい）。これはもう駄目だ。テコでも動くまい。

「はあ……」

なぜこんな厄介なことになったのだろうか？
いや、大体の原因は目をつぶってでもわかるが。
……恐らく、私がこんな気持ちにならなくてはいけない理由の発端
は、今からおよそ一時間ほど前に違いない。

一時間前と言えば、私は撮影用のオープンカーを爆走させていた頃だ（自分で爆走とか言うのもおかしい話だが）。
撮影、というのは誰もが想像しているようなあの、撮影と考えるてく
れていい。ちなみに映画の撮影だ。

ただし、私は女優ではない。
普通、爆走するオープンカーのハンドルを切り、崖っぷちギリギリ
のところオープンカーを乗り捨て地面を転がるようなことを女優
がするはずはないからだ。

ここまで言えばお分かりいただけるだろう。
つまり、私はスタントマンというわけだ。

私が乗り捨てたオープンカーは、崖を見事に滑り落ちて海におさら
ばした後派手な爆発音を立てた。
（車自身がこんな最後を願っていたかどうかはさておき）こいつも
見事な役者だったとつくづく思う。

ただ、本来なら車が海に落ちた場合爆発するということとはあまりな
い。そこはやはり映画だなと失笑してくれても結構だ。

海に沈んだオープンカーの残骸をクレーンで持ち上げたり、ボート

で残骸を拾い上げたりする作業を崖の上から眺めていた私は、唇に引っ付いた髪の毛を払いのけほっと一息ついた。

今回のスタントも無事終了と。振り向くと、監督が撮影スタッフに混じってこちらに親指を突き立てた。

スタント撮影で一発オーケーほど気持ちいいものはない。

撮影が終わってしまえばスタントマンは用済だ。あとはまっすぐ帰宅するに限る。

私は駐車場に停めてあったカマロにキーを差し込む。赤いボディの車体を真つ二つに引き裂くかのように白いラインが走っている。

こいつはなかなかの年代物だが、新品に劣らない働きを見せてくれる。滅多に故障しないし、それになによりドライバーを裏切らない。私のいい相棒だ。

そんな喋らない相棒に私が乗り込もうとした瞬間、背後から気配を感じたので私はすぐさま振り返った。

その瞬間、背後にいた人物は驚いて「わっ」と声をあげた。ちょうど私に話しかけようとしていたのに私が振り返ったのが予想外だったらしい。

私の背後に立っていたのは、金髪を後ろで緩く結わえていて、良く言えば儂げ、悪く言えば顔色がいつでも悪そうな印象を与える女性だった。

はて、この人はどこかで見たな。

「何か用？」

「あ、あの……」

女性は小さな声でそう言い目を伏せる。何が言いたいんだはつきりしてほしい。

「あ、あなたが、ヒサギさんですか？」

「……それが何か？」

「ああ！やっぱり本物なんですネ！？」

私の名を騙る奴がいるのか！？逆に！その場合、そいつには少し制裁を食らわせなければなるまい。

ちなみにヒサギ、というのは私の名前だ。漢字では楸と書く。だが、ここは英語圏なわけだから常用漢字ですらないこの字を書く機会はほぼ皆無だ。

まあ、それはさておき。

「私がヒサギだとわかって、用件は終わりか？なら帰らせてもらう用が無いなら呼び止めないでほしい。

私はカマロの運転席に乗り込んでエンジンをかけた。すると彼女はカマロの正面に慌てた様子で立ちはだかる。……轢かれないのだからうか。

「ま、待ってくださいっ！私の話を聞いて！」

あんた誰だっけ？轢かれるぞー。

「ほら！私ですって」

知らん。

「リーナ！エリックです！あなたがスタントをしていた映画の女優
！！」

「……ああ」

思い出した。どつりでどこかで会ったような気がしたわけだ。
でも、なんで女優がスタントマンである私に話しかけてくるんだろ
うか？はつきり言っただけ理由がない。万が一私を労うために声をかけ
たのなら、そんなことは撮影終了直後にすればいい。意味不明。さ
っぱりだ。

「そこ、どいてくれない？」

「いいえ！」

なるほど、私が逃げられないようにカメラの前に立っているわけか。

「……何か用？」

「あなたにプライベートでご相談したいことが！」

「なに？」

「取り合えず、どこかで話しましょう？」

嫌だね。

……と言いかマロを走らせて逃げたかったが……言いにくい。
相手はさすが女優といったところか。私を引き止める切実さが半端
じゃない。

「……はあ」

思わずため息をひとつもらす。なんだか彼女の話聞くのは気が引
ける。私の本能が警笛を鳴らしているからだ。
嫌な予感がする……。

だが、相手は私が首を縦に振るまで退いてくれそうにない。面倒な
ことだ。

仕方がない。

「……取り合えず乗れば？そこに立たれていたら叶わない」

「ありがとう！」

三十路を過ぎたかどうかもわからない儂げな女性は、嬉々としてカ
マロの助手席に乗り込んだ。にっこりと微笑むその顔に裏の感情は
潜んでいなさそうだった。

しょうがないな。適当に話を聞いただけ聞いておこう。

私は撮影現場の近場で目についたカフェの近くにカメラを停めた。つたく、駐車代にいくらかかると思っているんだ。スタントマンは安定収入が得られる職ではないんだ！いまこっちはギリ貧寸前なんだぞ。

だが、相手はそんな私の感情に気づいてくれるはずもない。私が表情を変えないのもあるが、彼女がそういう性格なのだろう。

適当にコーヒーとケーキを注文し、ウェイターが消えたのを見計らって私は本題を切り出した。

「で？相談と言うのは？」

すでに気づいてる人もいるかもしれないが、私は回りくどいのが嫌いだ。

私の言葉に、しばらく私の顔を見つめていたリーナは、なぜか頬を赤らめた後に慌てて姿勢を正した。何をしているんだこの人は？

「私の顔に何か？」

「い、いえっ！？別になにもっ」

彼女がそういうと、ウェイターがコーヒーとケーキを運んできた。リーナはコーヒーカップに手を伸ばし一口含む。そして、一言。

「あなたは……女優、ではないんですよね？」

「女優じゃない。……なぜそんな質問を？」

「いえ……なんでもないです」

まさか、これが本題ではない……よな？

「あの……。私の祖父が画家で、親が美術館を運営しているのは知っていますよね？」

「知らない」

なぜ知っていることを前提で聞いてくるんだ。あなたの家庭の事情なんて私を知るはずがないだろうに。
この女性は少々自意識過剰きみだ。

「え、あつ、知らない……。えーっと、私の親は美術館の館長なんです。『ブリテン・トリックアート』っていう英国イギリスにあるトリックアートの美術館なんですけど」

そうだ、リーナはたしか英国人だった。ハリウッドデビューしてこつちに来たんだったっけ。

「それで？」

「その、『ブリテン・トリックアート』に……予告状が届いてしまつて……」

「ふーん？」

「……」

「……」

沈黙が流れるなか、私はケーキをフォークで切る。

……ちよつと待った。今なんて？

「予告状？今、そう言った？」

「はい」

「……」

ヨコクジヨウ？

つて、あの？まさか物語とかに出てくるような、あの？

いやいや、待った。まだ何の予告状か聞いていない。もしかしたら、パーティーの予告状かも知れないではないか。早合点は良くない。

「予告状か。それはまた凝ったことを。ちなみに、誰から？」

私がそう言った瞬間リーナの眼光が強まった。

「……怪盗ルネットです」

最悪だ。

やはりそうだった類いだっただか。というか、なんだ怪盗って。この世に存在していたのか。とつくの昔に絶滅したかと思っていた。と
いうか、繁栄した試しなどない。

「悪戯だろう？」

「知らないんですか、怪盗ルネットをッ！」

リーナが声を荒くする。頼む、叫ぶな。

私を知るわけないだろう、そんなふざけた奴を。

「今、英国を中心に様々な場所から盗みを働く有名な怪盗なんです！狙ったターゲットは必ず盗み出します。今までの成功率は百パーセント！そんな怪盗が私の家の美術館に盗みにはいるといっているんですよ！」

はあ、そうかい。

「なぜ私にそんなことを知らせるんだ？警察に任せておけばいいのに」

「警察の見張りの中でルネットはそれを嘲笑うかのように犯行を繰り返しているんです！警察に任せているだけでは盗まれてしまいません」

リーナは悲痛に叫び両手を組んだ。今から“ロミオとジュリエット”の一説を唱えても何らおかしくはない気迫だ。

『ああ、ロミオ！なぜあなたはロミオなの！？』

正直、その気迫が怖い。

「だ、だからなぜ私にそれを言う……？」

すると、リーナはいきなり真顔に戻ってこんなことを言った。

「だって……」。

あなたは探偵の友人なんでしょう？」

「……………」

私はフォークを持った手で頬杖をつきながらリーナをしばらく見つめた。

カラン。

そのフォークが音を立ててテーブルの上に落ちる。

「……………今、なんて？」

私は静かに聞いた。それしか言葉が思い浮かばない。

「え、ち、違うんですかっ!？」

「……………今、なんて？」

「だ、だから、あなたが探偵の友じ」

「違う!断じてッ!！」

私は恐ろしい言葉を発したリーナにむかってテーブルを両手で叩きながら叫ぶ。

誰があんなやつ友人だ!勘違いも甚だしいッ!!

「どこのどいつだ!!!そんなことを言っているホラ吹きはッ!!!」

「で、でも知り合いではあるんですよね？」

「いや！あいつはストーカーだッ！！」

「やっぱり知り合いなんですネ！」

「待て、話を聞けッ！」

なぜ手を合わせて喜んでるんだ、こいつは！！あいつはまともじゃないんだ、おい！目を輝かせるな、聞いているのか！？」

「ぜひ、彼……あ、彼女かしら？とにかくその人に怪盗から美術品を守っていただきたいんです！紹介してください！」

「断る。接触すらしたくない」

「そこをなんとか！」

「嫌だ」

私は腕を組む。絶対に紹介するもんか！彼女は、あいつの（ある意味での）恐ろしさを知らない。いや、なにより……私は事件に巻き込まれたくない！

ガタンッ。

なんだ？

いきなり彼女が席から立ち上がった。そして、何をするかと思えば。

「 お願いしますっ！この通りです！！」

「 お願いしますっ！この通りです！！」

いきなり彼女が席から立って平身低頭し始めたものだから、周囲の目が彼女、そして私に注がれるのはある意味当然と言えた。しかし、もちろんその視線の中には白い目の視線、驚きの視線、好奇の視線……つまり私を居たたまれない気持ちにする視線も少なからず含まれているわけだから、私は控えめながら切実にこう言わざるを得ない。

「 ……頼むから、落ち着いて、席に座ってくれないか……！」

恥ずかしいと思ったらありやしない。ここはカフェの中なんだぞ！！

「 いいえ！私はあなたが良いと言ってくれるまで頼み続けます！どうか、この通り！」

さらさらと、彼女の長く伸ばした金髪が重力に従い垂れる。危うくコーヒーカップに入るところだ。

「 いや、だから……！」

私は、人目がなかったなら両手を高く掲げたかった（今でもそうしたい）。これはもう駄目だ。テコでも動くまい。

「はあ……」

これで、冒頭に至るまでの過程はわかっていただけだと思う。

わかるか？

直接的ではないが、こんな面倒くさいことになったのは、あいつのせいなんだ！

裏探偵を名乗る、あいつの！

#2 ソムリエ

何の嫌がらせか、結局私は不本意ながら裏探偵のいる場所へと案内する羽目になってしまった。愛車カマロを走ら、目的の場所へ向かうことにする。

突然話は変わるが、バツカス（B A C C H U S）という名前の神をご存じだろうか？

別名はディオニューソスとも言い、ギリシャ神話に登場する酒と豊穡の神だ。人々にブドウ栽培を教えたとされる。（ちなみにバツカスは英語名だ）

バツカスの人生はなんとというか、波瀾万丈そのものというべきだった。

彼は言わずと知れた神ゼウスとテーバイの王女セメレーの子（ちなみに浮気だ。全知全能が聞いて呆れる）なのだが、ゼウスの妻ヘラはセメレーを大変に憎んだと言う。ヘラはセメレーを唆し、雷を帯びたゼウスの本体に会わせ焼死させてしまう。（夫が夫なら妻も妻だな）それでもヘラの怒りは収まらず、胎児であるバツカスも手にかけてようとした。だが、ゼウスはそんなバツカスを匿った。

生まれてすぐにヘラに追われる身となったバツカスは、ギリシャを中心に逃亡生活をしながら、その間にブドウ栽培方法を身に付け民衆に伝えた。それが豊穡とぶどう酒の神の由来らしい。

まあ、バツカスは女性信者が多い。神話の中にはバツカスの信仰を恐れた従兄弟が信仰を禁止したところ、彼は女性たちをけしかけて

その従兄弟を殺させたとか何とか……。

「まあ！それは恐ろしいですわね！でも、なぜ今その話をするんですか？」

運転席での私の説明を聞いたリーナは、わざとらしいぐらいに驚いたような反応を見せ、その後私にそう尋ねた。

確かに。私はギリシャ神話にも、神様どもの嫉妬愛憎劇にも興味はない。だが……。

「今から行く場所に……声を聞くだけで叩きのめしたくなるような奴がいる。そいつに説明させるぐらいなら、私が事前に説明してさつさとそいつに用件を引き継いでしまった方がはるかに楽だからだ」

「あら、今からいく場所に探偵がいるのではないんですか？」

「さあね」

そもそも、探偵は見つけようとして見つかる奴ではない。手っ取り早く見つけるには、あいつ行きつけの店に行くのが早い。

「じゃあ」

「質問はなし！どうせ私には手に負えない相手だ。着いたら後は自分で何とかしてくれ」

私はなおも喋ろうとするリーナに言ってやった。彼女は相当なおし

やべりで困る。運転に集中できやしない！

私はそんな気持ちを含め、さらにアクセルを踏み込む。すると、慣性の法則によってシートに押し付けられたリーナの口数が六割ほど減った。

車一台がギリギリ入ることの出来る細い路地を徐行し、私はレトロなカマロを端に路上駐車させた。レンガの建物が四方を埋め尽くしている。

私はリーナに車から降りるように言ってエンジンを切る。鍵をポケットに突っ込んで、私も道路の上に降り立った。

路地には人の姿がちらほら見える。その中にはビジネスマンやカッブルの姿も紛れていた。まったく、ご苦労なことだ。

しばらく路地に沿って歩いて見ると見えてくるのが、レストランで見かけるような二つ折りの木製の看板だった。勘の鋭い人ならお分かりいただけると思うが、その看板にはこう書かれている。

『 Wine Bar “ BACCHUS ” (ワインバー “ バッカス ”) 』

そう、バッカスと言ったらあの豊穡と酒の神のバッカスだ。

まあ！ワインバーと豊穰の神をかけているなんて素敵ですわ！……と、横にいるリーナが目を輝かせる。

果たしてここで働いている奴を見てもそんなことが言えるかどうか……。

（いらぬ補足かもしれないが、ワインバーとはウイスキーなどを扱う店とは違い、ワインを中心に扱うバーのことだ。）

バツカスと書かれた看板の横の建物には地下へと続く階段への入り口がポカリと空いていた。つまりはここがバツカスへの入り口と言うことだ。

私は背中ではしゃしゃしているリーナを空気と見なしながら、重い足取りでバツカスへの階段を降りる。

階段は五段ですぐに終わりを告げた。すると現れるのは当たり前だがこのワインバーを訪れる客を迎えるドアだ。

木製で、歪なダイヤモンドのようにカットされた多角形のガラスがエイチ（H）の形にはめ込まれている。

とりあえず、私はそのドアの取っ手に手をかけ、押す。するとドアに取り付けられたベルの小気味良い音が鳴り　響かなかった。

「あ………？」

何で開かないんだこいつは。

私は何回か取っ手を回して引いたり押ししたりしたが、ドアは鍵がかかっているらしく、ガタガタとドアは微動しかない。蹴ってこじ開けると言うのか。

「あの……ヒサギさん？」

リーナが控えめに私の後ろから話しかける。なんだ、こっちは取り込み中なんだが。

「……“Closed（閉店中）”となっているんですけど……」

「……」

……なるほど、オーケー。あちらは徹底抗戦の構えか。上等だ。……わかってるよ、ただ店が閉まってるだけだってことぐらい。ムキになる必要はない……。

「おい、眼鏡！いるのはわかってるんだよ！おとなしく開ける！」

「ひ、ヒサギさん……！？」

「どーせ今日の仕込みでもしてるんだろうが！私だけあいつ絡みで苦労するのはたくさんだ！大人しく鍵を開ける！」

さながら借金の取り立てをするヤクザみたいだが、この際そんなことを気にしていたらこの人生を渡れやしない。叫びのついでにドアを叩く音のおまけをつける。

「おい聞いているのか！？めが」

「ねと呼ぶのはよしなさいッ！……」

バンッ！！

「きゃあっ!?!」

乱暴にドアが内側に開かれたと同時に、低い声が私の叫びを遮った。と、同時に後ろにいたリーナが小さく悲鳴をあげる。それはそうだが、こいつが唐突に姿を現したのだから。

私は微動だにせずに見み付けてやったが。

ドアを乱暴に開け放ったのは私より少し背の高い黒髪黒目の男だ。フレームの無い眼鏡をかけ、髪は後ろでひとつに結わえている。

男の癖に髪が長いなんて気持ち悪いつたら無い。……と、いつかそんなことをこいつに言っちゃった時があった。するとこいつは『髪型とかの風貌などは個人の自由』とかをほざく。こいつはそんな奴だ。

「何なのですかあなたは。開店前の他人の店へ騒音を立てながら押し入ってきて!それが良い年したレディのすることですか?」

やはりこいつは今日も店の仕込みをしていたらしい、普段店の中で着用しているバーテンダースーツに身を包んでいた。眼鏡越しの切れ目から相手を射抜くような鋭い視線を投げ掛けている。

「黙れ、私はあんたに自らの年を明かしたことなんて一度もないんだよ!黙って店に入れる!」

「近所迷惑で訴えますよ」

「私の声がレンガ向こう十メートルの隣家にまで響くと言いたいか?」

「あるいはそうかもしれませぬ」

「あああああ！だあからあんだとは会話をしたくないんだ！！」
「ではなぜあなたはここに来たのです？さっさと帰りなさい」

私を苛つかせるこいつは私に向かって“あっちいけ”と手で仕草をする。

はあ……。

私は仕方がないので後ろで控えていたリーナの姿を見せた。すると、こいつは眼鏡を指で押し上げて“誰だこいつ”と言う顔になる。

「……まさかとは思いますが、彼女は……」

この反応……詰みだな。

「リーナ」エリック……あなたはレディを……しかもハリウッド女優をドアの前で待たせる気か？」

私は笑みを浮かべて眼鏡にそう言ってやった。

バーは四方が十メートルほどの広さで、壁にはワインセラーが所狭しと置かれ、そこにこれまた大量のワインが置かれている。私にはそのワインたちの種類ならず酒類やラベルなどは一切わからないが、バーの奥はカウンターになっていて、カウンターの天井にウィングラスがぶら下がって光を放っている。やたらにその光が視界に入ってくるので私からすれば邪魔でしかたがない。

店に足を踏み入れる前から、リーナは借りてきた猫のように静かだった。そうだったのは丁度私がドアに向かって叫んだときぐらいだが、まあそれは気にしないことにする。

カウンターに座った私たちだが、こいつはリーナの前にだけグラスコースターを差し出す。こいつ！

「バツカスへようこそいらっしやいました。わたくしはこの店長をしております、ソムリエのクラウド[〃]ダイスンと申します」

開店前にも関わらず丁寧口調で客をもてなす眼鏡　もといクラウド[〃]ダイスン。こいつは律儀にこうしなくては気が済まない質だ。^{たち}

「私はリーナ[〃]エリックです」

一方リーナの方はなぜかクラウド[〃]ダイスンに対して目を輝かせながら自己紹介をする。すると彼は「あなたの出演する映画、見させてもらいましたよ」と適当な世辞を入れながらソムリエナイフという代物を取り出す。

これはワインを開けるためのもので、片端にはワインの封を開けるためのナイフがついており、逆の端にはコルクを開けるためのスクリューがついている。ちなみに、スクリューはコルクにまっすぐ差し込まなければ、コルクを抜くときに千切れてしまう……らしい。

私は開けたことがないからわからないが。

「なにぶん開店前なので満足したワインはお出しできないかと思いますが……」

ソムリエがそう言うものだから、私はこいつが勘違いしないうちに先手を打っておくことにする。

「彼女はワインがご所望ではないらしいぞ」

「……はい？」

予想通りの反応だ。それに追い討ちをかけるかのようにリーナがこつ言っ。

「あなたが、探偵さんですか？」

「……」

しばらくの間ソムリエは、電池交換間際のロボットのごとく、その全拳動を静止させた。

その間に手からソムリエナイフが落ちてカリーンと乾いた金属音が鳴る。

そして何を思ったのか、リーナを凝視しながらこう告げる。

「……今、なんと？」

「えっ？……あなたが探偵さんじゃないんですか？」

「……今、なんと？」

「え、えーと、あなたが探偵さんで」

「スタントマンッ！！あなた、謀たくりましたねッ！？」

「なんだそりゃ」

人聞きの悪い。

「わたくしにあの人の人関係の人を連れてくるなとあれほど申したではありませんか!!」

「知るか。私だって嫌だったが、リーナがテコでも動きそうになかったから仕方がない。手っ取り早くあいつに引き渡すのがいいぞ楽だ」

「あの人はどう転んでもわたくしたちを巻き込むでしょう!？」

「うるさい。耳元でがなるな。とにかくどこの人探し業者よりここに来た方があいつを見つけやすい。早く連絡を取れ」

「ああ……もう……!」

ソムリエが眼鏡の間から眉間をつまんだ。今頃ストレスから来る頭痛に苛まれているに違いない。

#3 主人（オーナー）

まだ裏探偵を見たことがない人物は、奴がどれくらい厄介で、トラブルメーカーで、手を焼かせる存在かわからないだろう。だが、心配無用。今から嫌でも理解することになるのだから。

ほんの少し それはもう雀の涙以下なのは間違いないぐらいほんの少し、裏探偵に振り回される目の前のソムリエに私は同情した。彼はカウンターの中から薄型のノートパソコン（ああ、これは恐らく最新式だ）をリーナと私の真ん中に置き、フタを開ける。そしてソムリエは実に嫌そうな顔をしながら、カウンターから少し離れた通用口近くの壁にくっついていて電話の受話器を手に持つ。二つほど補足を入れると、ソムリエは普段からこんなな感情が面に表れることはまずない。基本ポーカーフェイス（いや、無表情か？）で、何を考えているか全くわからない。そんなソムリエが嫌な表情をするというのは、それほど裏探偵が面倒な奴なのだ。もうひとつ。壁にかけられた電話は、恐らく一世記は優に過ぎ去つたであろう古風すぎる電話だ。鉄製で、耳当てと喋り口が小さいカップのようになっている。超デジタルなパソコンとアナログな電話で何をしようとしているかというところ……。

「あの……なぜパソコンを出したのですか？」

リーナもやはりソムリエの行動に疑問を抱いたらしい。彼は受話器

を持っていない手で眼鏡を押し上げながら答える。

「この電話機が直接裏探偵を名乗る人物へと繋がります。すると、彼……あるいは彼女からそのパソコンを使いこちらに接触してくるのです。ミス・エリック、パソコンを起動していただけますか？」

リーナはすぐにパソコンのりんごマークのボタン　つまり電源ボタンを押す。

「このノートパソコンはあんたのか？」

「そうですが、それが何か？」

「どうやらソムリエはWindowsウィンドウズ派らしい。別に何派だろうが私に関係はないが。」

「これで本当に探偵さんは来るんですか？」

リーナが模範的というか、形式的な質問を投げ掛けると、ソムリエは律儀に「いいえ、違います」と答えた。その後の女優さんのひどく落ち込んだ顔が何とも涙を誘うね。

「彼　わたくしにも性別はわからないので便宜上彼、としますが　は、わたくしたちの前に直接姿を現すことはまずありません。なかなか悪趣……凝った人なので、人前に姿をさらさないのです」

さすが鉄面皮、リーナのチワワのようなうるうる顔にもおくさずにさらりとした表情で言ったのけた。少々本音が出かけた気がしたが。

「人前に現れるとしても、それは彼が変装した姿で、自分の本当の姿ではないらしいのです。……本人曰く」

「とにかく、探偵が直接ここに『現れる』かと言ったらノーだ。だから“裏探偵”とでも言われるんだろう」

「裏探偵……」

私が結論を手っ取り早く伝えようと、彼女は神妙な顔つきで名前を反芻した。

裏探偵……聞こえはいいがフタを開けたらただの物好きな探偵なだけだな。

と、話が一段落したところで私とリーナのよこにあるノートパソコンがジジツ、とノイズをあげた。そしてディスプレイ上に音感センサー（奴がしゃべる度に反応して波がたつ仕様だ）のような画面が現れる。どうやら来たようだ。

『いやあ、待たせたね諸君』

いつそのこと一生待たせた状態がよかったのに。

私は足を組み替えながら内心で罵る。

「いつそのこと一生待たせた状態でもよろしかったのですよ？」

どうやらこいつも同じ考えらしい。ソムリエナイフでワインの封のラベルを切りながらそっけなく言った。リーナはソムリエの発言に驚き、掴もうとした空のワイングラスと彼女の爪がチンツ、と接触した。

『二人ともひどいよ！僕をなんだと思っっているんだい！？』

パソコン越しの、落ち着いた女性ともアルトの青年にも聞こえる声が悲痛に非難した。

こいつが何かと聞かれたら、強いて言う疫病神か。

……待て。二人？

『さて、ヒサギ君、君の店に来た依頼人を僕に紹介してくれないかな？』

「ちょっと待て！何で私がいることがわかった？声も発していないかったのに！」

いないふりをしてこちらに火の粉が振りかからないようにするはずだったのに！

すると彼（一人称が“僕”だから彼が適切だ）は私の反応を面白がるように笑った。

『いいかい、僕がこのパソコンに接続したとき、マイク越しにそこからソムリエナイフの音と、グラスが触れる音、足を組み替えたときに服が擦れる音が同時に聞こえたんだ』

つまり、ソムリエナイフを使っているときは決まってカウンターに立っているのですは組めない。このことから、少なくとも二人がこの場に居ることになる……と、裏探偵は説明した。

「だが、それでも二人だ」

『ヒサギ君、クラウドが一回でもワイニンググラスを君の前に用意した

「試しがあつたかい？」

「……あ」

「……そういえば。」

私は思わずカウンターに立つソムリエを睨んだ。彼は知らん顔を決め込んだ。ここからでは蹴りを入れることができないのが悔しい。

「わかつたかい？だから僕はさっき「三人」と言つたんだ」

裏探偵は自慢げに言つてのけた。間違はなく今ごろは画面の向こう側でしたり顔をしていることだろう。

そんな彼は、ひとつ咳払いをして真剣な声音で言う。

「さて、僕を呼んだからにはそこにいるのは依頼人だろう？紹介を頼むよ」

するとリーナの方も、背筋を伸ばして居住まいを正した。あつちは私たちの声しか聞いていないはずだが……彼女は忘れしまつていらしい。

「私の名はリーナ」エリックと申します。お会いできて光栄ですわ！どうぞよろしく願います、探偵さん」

リーナはやっと目的の人に会えてご満悦度が上がっている。一方裏探偵は彼女の名を聞いて驚いたような息づかいをパソコンのスピーカーから漏らした。

「リーナ」エリック！とんでもない大物女優じゃないか！主演を務めた作品は数知れず、アカデミー候補にもノミネートされている」

「まあ！探偵さんにご存じいただけて光栄です！」

「僕は、全てを“裏”で真実を探る探偵　裏探偵と申します。普段は主人と名乗っていますが」

「主人？」

リーナが（世間から見れば）可愛らしい仕草で首をかしげた。ちよ
うどそれと同じタイミングでソムリエがグラスにワインを注ぐ。
待て、こんな昼間っからリーナに飲ませる気か！

「なぜ主人と名乗っていらっしやるんですか？」

「簡単な話、裏探偵はそこにいる助手一号と二号がいてこそその“裏探偵”なのです。だから彼らと区別するために」

「助手じゃない」

「助手ではありません」

二人同時に否定してやった。すると主人は口頭で『グサツ！』と叫んだ。何をやっているんだこいつは。

「ま、まあ、僕のことは「主人」と呼んでください。時にリーナさん、このシチュエーション……何かの映画に似ていませんか？」

私たちに手痛い攻撃を受けて狼狽する口調から一転、今度は子供のよう
に無邪気な口調になって主人はリーナに問うた。なんとというか、
『こんなイタズラしたんだよ！みてみて！』といった雰囲気だ。

「え……映画ですか……？」

リーナもこの質問は予想外のようだったようだ。頭をひねり思考を巡らせる。つられて私も何の映画に似ているのか考え込んでしまった。スタントマンという職業のせいだろうか。

ワインバーに二人の客、一人の店長、姿を見せない探偵……？

「もしかして……“ジョンソンズ・デビルズ”ですか？」

何か思い出せそうだったのに、タイミング悪くリーナがある映画のタイトルを出してしまった。私の思索は半強制的に中断される。

『ご名答！一人の姿を見せない司令塔に、悪を裁く三人のエージェント！かの有名な映画、“ジョンソンズデビルズ”にそっくりですよ！？』

“ジョンソンズデビルズ”は、リーナ他二名が主演を務めるアクション映画だ。ジョンソンと言う名の、姿を見せない司令塔の元、悪魔的な三人の主人公が巨大な悪と戦うというストーリーだが……。

似てるのか？

私は映画の名前が出る前よりも首をかしげる羽目となった。

ちなみにあの映画の興業収入はかなりよかった。近々続編のクランクインに入るらしい。とてもいいことだ私の仕事が増える。^{スタントマン}

『さすがリーナさん、主演を務めているだけあってすぐにわかっていただけましたか！』

そういえば、あの映画の主演三人はすべて女性だったと記憶してい

るのだが……。

私がソムリエの方をちらりとみると、無表情に「なんですか」と言
つて来る。

そうか、こいつは“女々しい”という精神面で三人のうちにカウン
トされているのか。

「スタントマン、今あなた失礼なことを考えませんでしたか」

「いや、別に」

ソムリエの問い方はすでに断定口調だった。チツ、目敏い奴め。

「確かにそっくりですね、この状況!!」

『そうでしょう!わかりますよねこの気持ち!』

主人オナーとリーナは二人して自分達の世界に入り込んで盛り上がってい
る。何がそんなに楽しいのかさっぱりわからないのだが、それは私
が悪いのだろうか。

「主人オナー、依頼人から話を聞かなくてもよろしいのですか？」

二人の話が脱線して軌道修正できない危険があるのでソムリエがそ
ろそろ本題にはいるように促した。主人オナーは急に思い出したように『
ああ、そうか』と言う。本当に忘れてたのか。

私としてはいつそのことここでおさらばしたかったのだが、リーナ
がいることをすっかり忘れていた。私がいなかったら彼女は帰るこ
とができないため、不本意だが私もここにとどまることにする。

簡単だ、依頼の話をしているときだけ私は空気と化せばいい。そう

すれば主人オーナーとばかりも受けることはないだろう。

……恐ろしく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5335z/>

裏探偵 Back Detective

2012年1月12日23時53分発行